

# 佐世保市に伝わる民話 「一里島」



## 【長崎県佐世保市に伝わる民話「一里島」あらすじ】

長崎県は日本で最も多くの島があることで知られています。その数 594 島（県公式ウェブサイトより）。長崎県佐世保には 208 もの島からなる、豊かな自然に恵まれた、九十九島という海域があります。その九十九島のお話です。むかしむかし、美しい月夜の晩に、佐世保の沖にある 100 の島たちがのんびりと話しをしていました。島の大將の松浦島が「今夜は、みんなで集まって、久しぶりにのんびり酒を飲もうじゃないか」と言いました。まわりの島々も賛成し、移動を始め、佐世保湾の中に集まりました。島たちはお酒を飲んだりして、歌を歌って大いに宴を楽しみました。一番若い一里島は、初めての宴会に大喜び。宴会では、美しい景色に囲まれ、美味しいお酒と食べ物が次から次に振る舞われます。ここ（佐世保湾）はなんと居心地が良い所なのでしょう。一里島は、すっかりくつろいで、飲み過ぎてしまいました。しかし、夜が明ける前に元の場所に帰らなくては、島たちは二度と戻れなくなってしまいます。夜明けが近いことに気がついた大將の松浦島が「さあ、みんな、そろそろ帰るぞー！」と呼びかけましたが、酔って寝てしまった一里島だけは全く起きません。仲間の島々はどうすることもできず、一里島をおいて元の場所に帰りました。こうして佐世保湾の中に一里島だけがぼつんと取り残されています。その時、百あった島が一つ減ったので、人々は、九十九島と呼ぶようになりました。